

**国語****【解答】**

I

問 1				
(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)	(オ)
納得	直観	観察	利益	喜
問 2	問 3	問 4	問 5	問 6
d	c	e	c	b
問 7	問 8	問 9	問 10	問 11
a	d	g	d	b
問 12	日本語がどんな性質を持つ言語かを示すと共に、日本語を使う人間にとって役に立つ伝達の手段を与えること。			

II

問 1				
(カ)	(キ)	(ク)	(ケ)	(コ)
過剰	懸念	深刻	推測	衝動
問 2	問 3	問 4	問 5	問 6
d	d	b	a	d
問 7	問 8	問 9	問 10	11
e	c	c	a	c

## 【学習アドバイス】

本学の入試は、例年5科目の中から2科目を選択して受験する形式を採り、試験時間は2科目合わせて100分となるので、各科目にかけるバランスにもよるが、平均的には50分程度が解答時間となる。「国語」は、現代文のみの大問2題で構成されている。2題とも論理的な文章で、2014年度は町田健『まちがいだらけの日本語文法』（講談社現代新書）とケリー・マクゴニガル著／神崎朗子訳『スタンフォードの自分を変える教室』（大和書房）から出題された。大問Ⅰは2013年度までと同様に、新書からの出題で受験生にとっては読みやすく、わかりやすい内容のものであり、大問Ⅱは簡単に入手できる本ではないが、内容は論理的でわかりやすく、決して難しい文章ではなかった。以下、具体的に出題形式・出題傾向・出題内容を見ていく。

まず大問2題に共通する問題として、漢字の書き取りがあげられる。それぞれ5問ずつ、合計10問の出題で、例年通り、特に難しいものはない。もちろん、日頃の学習をきちんとやっていることが前提であることは言うまでもない。ほかに毎年1問、50字以内での説明が要求される記述問題が出題される。残りの設問はすべて選択式問題である。設問により選択肢の数は4個から8個までであるが、本文を正確に読みこなすことができれば、全問に正確に答えることが可能である。中には思いのほか難しいと思われるものも含まれ、思わぬ時間を取られてしまうことがあるので、その点には注意が必要である。以下、それら紛らわしいものを中心に解説していこう。

ほとんどの設問が選択式ではあるが、その内容は多岐にわたる。熟語・接続語・語彙・内容理解・解釈などであるが、これらは言葉の一定の知識や、読解力があればそれほど困難はなく、正解を選択できる。ただし、これら以外で一番数が多いのは、実は空欄補充の設問である。これらに、かなり紛らわしい選択肢が含まれていることが多いので注意が必要である。難しく、また、紛らわしく感じられるのは、本文中に明確な根拠を見出すことがうまくできず、消去法でもなかなか正解を絞りづらいつらいことがあるからである。空欄の数も多く、しかも空欄同士が近いために本文の内容を読み取ることが難しいのにも原因があるかもしれない。

しかしながら、本学の問題には難問・奇問はなく、また、難易度的にみても、全体としては極端に難しい設問はない。したがって、最終的には平素の学習の積み重ねをきちんとしておけば、ほとんどの設問に十分対応できるものであると考えられるので、以下に学習のアドバイスを。ぜひ参考としてほしい。

漢字は「入試頻出漢字」の問題集を一冊仕上げれば十分である。肝心なことは、一冊を繰り返し反復練習することである。その際、時間を有効に用いる工夫をすれば、特別な時間はそれほど取らなくて済むだろう。次に記述式。これはとにかく問題に慣れることが肝要であるので、過去問や同様の設問をまとめた問題集などにあたるなどして、早めに演習するなどの対策を立てる必要があるだろう。記述式は慣れるのに思いのほか時間がかかるので、その点にも注意が必要である。残りの選択式設問も同様であるが、それでも一冊の標準レベルの問題集を仕上げれば十分であろう。

ただし、これらには前提があるので注意してほしい。それは何よりも学校での普段の学習を大切にすることである。その基礎力があって初めて問題集に取り組むことができるということを、くれぐれも忘れないように学習に励んでほしい。また、最近話題になった新書を何冊か読んでおくことも有効であろう。

最後に、本学の国語の問題は「横書き」である。「縦書き」に慣れていると思うので、過去問等で「横書き」にも慣れておきたい。